

---

# アフターヒーロー

F

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アフターヒーロー

### 【Nコード】

N0167W

### 【作者名】

F

### 【あらすじ】

“悪”に改造された男の物語。

作者が中学生の時に書いた作品（黒歴史）を多分に加筆修正したものです。

暇つぶしにどうぞ

## 0話 始まり

将来、成りたいものはありますか？

園児だった時や小学生低学年の時に聞かれたことだ。

その時は適当に答えたけど、本当のことを言うと僕は……

僕はヒーローになりたい。

“悪”を挫き弱きを助け、感謝と尊敬を一身に浴びる孤高の男。

僕はヒーローになりたい。

しかしこの世界に明確な敵がない。

そう、単純なわかりやすい“悪”。

殺し、奪い、欲を貪る、漫画やアニメのような敵がないのでは、僕は僕が望むヒーローにはなれない。

……そうだ！！

“悪”がないなら、“悪”を作ればいい！

怪人（悪）を作り、人を襲わせる。

その怪人はとても強く、たとえ軍であろうとも勝てない。そんな強大な敵。

しかし自分だけは倒すことができる。  
そして襲われている人々を助ける。

そう、

それは

つまり

“ヒーロー”

# 1話 終わり。そして、、

ブラック「フッフフハハハ！どうした？その程度か！？  
ならば死ねえい！」

ドゴオオオツツ！！

“悪”の首領にして俺とファイヤーゴールドを改造したマッドサイ  
エンティスト、《ブラックサンダー》  
自らを改造して“最強”を手に入れて男の攻撃がファイヤーゴール  
ドを窮地に追いやる。

ゴールド「くうつつ！？」

ま、まさかこんなにも力の差があるだなんて……」

俺「諦めるな！立てッゴールド！あの子達との約束を忘れてたのか  
！？」

ゴールド「ッ！、、そうだ。俺には、俺達には！  
負けられない理由がある！！」

たとえその身を被う装甲は全身ヒビ割れ、その隙間から多量の血が  
流れ、“最強”の壁の前に絶望を突き付けられ地に膝がついたとし  
ても！

戦友<sup>とも</sup>の声を、

未来を紡ぐ幼子の祈りを、  
誰もが笑顔で居られる明日への希望の光をその心に宿し、何度でも  
立ち上がる不屈のヒーロー（ファイヤーゴールド）

ゴールド「この技で、貴様を倒す！ハアアアアア！！」

ファイヤーゴールドの全身が金色に光り出す！

ブラック「な、なんだこの力は？！」

バイオレット「させませんよ！死になさい！」

俺と対峙していたバイオレットローズのローズウィップがゴールドの生命を刈り取るうとする。が――

俺「それは俺のセリフだ！『コールドエンド』 オオ！」

俺とバイオレットローズを取り入れるように透明な氷が現れる。

『コールドエンド』

それが俺の、アイスシルバーの必殺技。

己の全てのエナジーを氷に変換し、自らと対象を溶けることのない氷の彫刻へと変える究極自己犠牲技

バイオレット「ば、馬鹿な、、この私が量産品ごときに、、？  
申し訳ありませんブラックサンダー様ッ！」

完全に凍り付くバイオレットローズ。

そしてファイヤーゴールドの輝きが臨界に達し――

ゴールド「くらえッこれが俺の全てをかけた一撃ッツ！！

『ゴールデンエクスプロージョン』！！！！！！」

ツパアアアアアアアア！！

ファイヤーゴルドの突き出した手のひらがブラックサンダーに当たり、そこを中心に黄金の光が全てを包み込むように広がって――

俺は氷の棺の中で眠りについた

## キャラクター紹介（前書き）

ネタバレの部分は省かせてもらいます。



## キャラクター紹介

「ブラックサンダー」

0話の男の子が成長した姿。

世界の腐敗に絶望し、世界を改変するために“悪”の首領及びマッドサイエンティストになる。

自らを改造し、最強を名乗る。（自称最強）

「さあ、新たな世界を創ろうか。より良き未来の為に」

「ファイヤーゴールド」

友人がいないブラックサンダーが、お仲間欲しさに一般人を攫い改造することによって生まれた哀れな被害者。

ブラックサンダーの下から逃げる際に、隣の部屋で改造されていたアイスシルバーを連れて逃げる。

以降ブラックサンダーと対立する。

「これ以上、誰の幸せも奪わせはしない！」

「アイスシルバー」

本作品の主人公

量産型怪人のプロトタイプ「シルバーゼロ」としての改造中にファイヤーゴールドに連れ出される。

改造前の記憶が無く、学校などの教育を受けていない為結構なアホ。悲劇で孤高な男を演じる厨二病患者。しかし演じきれてない。外見的に15歳。

「俺は……ぐっ！？頭が、割れるようだ?!」（噓）

「バイオレットローズ」

“悪”の幹部。

鞭使う。自称二十歳。

アイスシルバーの技により氷づけになる。

「グレースパイダー」

“悪”の怪人

何らかの活動を開始しようとするが、

偶々居合わせた薬局での買い物帰りのおばちゃんに殺虫剤をかけられ死亡した悲劇の怪人。

「レッドキャンサー」

“悪”の怪人

堅い殻に大きな爪を持ち、ゴールドとシルバーの攻撃を無力化し力ウンターを繰り出す難敵。

最終的にファイヤーゴールドに遠距離から焼き蟹にされ、美味しく

頂かれた悲劇の怪人。

「竹中（仮）」

作者の友人

高校生の時、困っている同級生（女子）を助け「ヒーローや!」と言われてヒーローになった男。

作者、その場にいました。

その後も道で困っているおじいさんを助ける、  
体育館で演説中に倒れた女性を一人で保健室に運ぶなどの活躍を魅せる。

「エナジー」

ソレっぽい力  
察して下さい。

## キャラクター紹介（後書き）

詳しい姿が書かれていないのは読者様に想像を楽しんでいただく為です。

御了承下さい。

## 2話 150年後

……ダメだ、止めるゴールド、確かに蟹だ。だがそれは怪“人”だぞ！

蟹を食ってカニバリズムなんて冗談にならな、ダメだ！ダメッ、アッ……

- - - - -

ピコーン……

……ピコーン……

ここは、何処だ？

気がつく俺はあおむけになっていた。

手も、足も、首も動かすことが出来ない。

辛うじて目を動かすことが出来た。

だがそれさえも酷く億劫に感じる。

何処からか聞こえてくる電子音。

目に映るのは真っ白な天井。

天井と俺の間には透明なガラスが。

なけなしの気力をかき集め目を動かし周囲を確認する。

……白い壁しか見えない。

おそらく俺は白い箱に寝かされているんだろう。

ダメだ、、頭が回らない、、

z z z

z z z

- - - - -

ハッ

……ここは、何処だ？

さっきとは違う天井。

ガラスもない。

鈍く痛むが体も動く。

体を起こして辺りを確認する。

八畳ほどの広さの部屋。

床はフローリング

壁には大きな窓がり開いていた。

そこからは太陽の柔らかな日差しと心地よい風が。

部屋の中にはベッドが一つ

俺はそこに寝かされていた

…どういうことだ？

俺は自らの全てをかけた技でバイオレットローズと共に凍り付いたはずだ。

それは二度と溶けないはずだ、、

ガチャ

？「起きたか。アイスシルバー」

部屋の扉が開かれ見知らない男と女が入ってきた。

男は俺でもわかるぐらい質の良いスーツを着ている。年齢は30歳ぐらいか？

女は、、秘書か？

それっぽいスーツを着てスタイリッシュなサングラスをかけている。赤と紫の中間のような色の髪をしている。

俺「あんたらは？」

男「おっと失礼。私は金野<sup>いんの</sup> 火矢<sup>ひや</sup>」

女「私は薔薇井<sup>ばいじい</sup> 紫と申します<sup>むすめ</sup>」

2人とも妙な名前だな…！？

俺「待て、金野だつて？まさか、、」

金野「そう、君の相棒ファイヤーゴールドの子孫だ」

- - - - -

金野「落ち着いたかねアイスシルバー、いや“零式<sup>ゼロしき</sup> 百夜<sup>ひゃくや</sup>”君」

金野の問いに素直に頷く俺。  
恥ずかしい話、俺は多大なショックを受け少々取り乱した。  
子孫。この言葉にだ。

この部屋に特に物が無かったおかげか何かを壊すといったことは無かったのが救いか。  
いや、おそらくは取り乱すことを予測して何も置いて無かったのだろう。

そう思うと何だか悔しいな。

……ん？

俺の名前について、だと？  
かつこいい名前だろ？

ブラックサンダーに改造されてから過去の記憶を俺は失った。それは当然名前もだ。  
だから自分で名前を決めた。

“零式 百夜”  
0（無）から始まり100（全て）に至る。  
そんな想いを込めて。

……話を戻そう。

秘書？の薔薇井が何処からか用意したテーブルとイスに座る俺と金野。

薔薇井は紅茶を入れている。

俺「すまない」

金野「構わんよ」



薔薇井が高級そうなカップに入った紅茶を勧めてきたが、熱い飲み物が苦手な俺は冷めるまで待つことにし、金野がカップから口を離すのを見てから質問する。

俺「それで、ここは何処だ？あれから何年過ぎたんだ？」

金野「ここはゴールドエリア。君が眠ってから……今年で150年目だ」

### 3話 150年後(2)

俺「……いくつか質問がある」

金野「ふむ、出来る限り答えよう」

さて、何から聞くか。

聞きたいことが多すぎて混乱するが、まずは…

俺「ファイヤーゴールドはブラックサンダーを倒せたのか？」

金野「ああ。ブラックサンダーは光となって散ったと言い伝えられている」

俺「じゃあ何故俺は150年も眠っていたんだ？」

金野「それについての要因は2つある。

まず1つ目。

アイスシルバー、君の技“コールドエンド”によって君とバイオレットドローズは凍り付いた。

奇しくもそれはコールドスリープと言って良い状態だった訳だ。

私の先祖、ファイヤーゴールドは君を起こす為に氷を溶かそうとしたが、只の氷ではなく特殊な力を持った氷だったのでどうやっても溶けなかった。

素晴らしきはブラックサンダーの科学力といったところか。

もう1つの要因のこともあり、氷を溶かす科学力を得るのに150年といった時間がかかった訳だ」

話を区切り紅茶を飲む金野。

俺も飲もうと思いいカップに触れてみるが、まだ冷めてないな…

金野「次に2つ目。

これが一番の原因と言って良いだろう。

ブラックサンダーが倒されてから一年後、異世界からの侵略者が現れた」

その時、軽く俺の時が凍り付いた。

俺「……ハア？」

1分ほど、いやそれ以上か？の時間をかけて漸くひねり出した聞き返し（聞き間違いだと思いたい願望）も

金野「聞こえなかったかね？ならもう一度言おう。

ブラックサンダーが倒されてから一年後、異世界からの侵略者が現れた」

バツサリ斬られた。

…

……

……

漸く冷めた紅茶を一気に飲み干す。

俺「ゲホッ！ゴホッ」

噎せた。すごく恥ずかしい

薔薇井が俺にタオルを渡し新たに紅茶を入れる。

俺「んン」……それで？侵略者はどうなったんだ」

金野「ふむ、何と説明すれば良いか、、

結論から言えば、侵略者は今もまだこの地球を侵略し続けている」

俺「何だって……！？そうか、それに対抗する為に俺を起こしたんだな！」

みなぎってきた！

金野「いや違う」

しゅーん

金野「君をおこしたのはファイヤーゴールドの意志だ。それ以上でもそれ以下でも無い」

#### 4話 150年後(3)

金野「話を続けよう」

...

.....

.....

説明が終わった。

うん、よくわからん。正直半分寝てた。

とりあえず理解できた部分を要約する。

148年前、ブラックサンダーが倒されたから二年後。

世界各地に異次元の扉が開いた。

そこからモンスターが大量に現れ、人と人工物だけに襲いかかった。

そのモンスターは二足歩行で成人男性と同程度の体格を持ち、外

見は蟻や蜘蛛や犬やコウモリ等.....

ハッキリいえば、ブラックサンダーの怪人の姿と似通っていた。

不思議なほどに。不気味なほどに。

とはいえそのモンスターは怪人の1/5程度の強さだったのが救いか、怪人と戦闘経験のある日本やアメリカ、ロシア、中国、EU等の大国はブラックサンダーの遺産もありモンスター侵攻に対抗することができた。

ブラックサンダーの遺産は2つ。  
バリアとシルバーナンバーズだ。

バリアとは、モンスターを防ぐ球体状の“エリア”を造りだす不思議装置だ。

総数50機あり日本には4つ、東京、名古屋、大阪、広島に設置されている。

シルバーナンバーズとは、この俺“アイスシルバー”（シルバーゼロ）の技術を応用して造られた人造人間達だ。当時総数500体がバリアと共に世界各国に分配、日本には50体配属された。（現在総数250体、日本30体）

とはいえ倒せども倒せども湧き出るモンスターに人類はバリアの中に追い込まれていった。

そんな中、唯一異次元の扉を閉じた者がいた。それもたった1人でだ。

その者の名は“ファイヤーゴールド”。

異次元の扉にはゲートキーパーと呼ばれる上級モンスターが居り、それを殺すことで異次元の扉は閉じるという。シルバーナンバーズ100体を投入しても閉じれなかったことからファイヤーゴールドの凄まじさがわかるだろう。

当時日本には4つ異次元の扉があったが、ファイヤーゴールドの活躍により2つまで減っている。（北海道、沖縄）

ファイヤーゴールドが最も活躍した“東京エリア”が“ゴールドエリア”と呼称されるようになったのもこの頃からである。

・  
・  
・

とりあえず覚えている（理解できた）のはこの程度だ。世界情勢など知らぬ！



## 5話 学園へ

ブロロ、ブロロ、ブロロロロ〜ン

俺は今、金野や薔薇井と共に車に乗りたい。

黒くて大きな、弁？だの理無刃だのよくは知らないがそんな感じの車だ。

150年未来だからといって空を飛んでいるだとか、透明な管の中を走っているだとかそんな不可思議な走行をしているなんてことは無かった。

今も変わらずに地面を走っている。

とはいえ燃料は昔と違い環境汚染など有り得ない物になっているらしいが。

窓から見える風景は150年前とほとんど変わらないように見える。

バリア越しの日差しも本当にバリアなど有るのかと疑問に思うほどだ。強いて言うならば妙に未来的なビルと地下への入口が増えているぐらいだろうか。

地下への入口……

金野の話を思いだす。

確か、農園や牧場など食料生産場は全て地下に移した、、だったか？

まあいい、それよりも今は

俺「まだ着かないのか？その、学校に」

そう、俺たちは学校に向かっている。



炎金防衛戦闘学園

だったか。

特にやることのない俺に、金野が常識を学び未来を生き世界を守る為にそこに行けと決められた。

火野「落ち着きたまえ。もう着く」

ため息でもつきそうな顔をする金野。

決してこの質問がすでに五回目だとか、説明された話を何度も聞き返した挙げ句未だに覚えきれないからこんな顔をしている訳では無い……はずだ。

- - - - -

そうこうしている間に学園についたようだ。

高さ5メートルは有りそうな門。

敷地を囲む白い壁。

何よりも東京ドーム何個分なのかと聞きたくなるような広さ。

校舎やグラウンドだけでなく、寮やレストランなどの施設も内包されており学園内で生活出来るようになっていたとのこと。

ゴールドエリアに住まう学生の半数以上がこの学園に通っているのだとか。

俺を乗せた車が学園の門を越えていく。

ここが、いやここから俺の新たな物語が始まる……

最高の高揚感と一抹の不安が心を満たした。



## 6話 学園へ(2)

門を入った所で俺は車から降ろされた。

俺を放り出した車はサッサと学園から出て行く。

追おうにもすぐに閉まった門がそれを阻む。

本来の俺なら門を突き破り金野を捕まえることも出来るだろう。

しかし今の、コールドスリープから解凍されまだ3日とたつておらず体調が万全でないうえに、

“変身”まで封じられた俺では不可能だろう。

？「零式 百夜君ですね？ようこそ！炎金防衛専門戦闘学園へ！」

恨みがましく門、の向こうへ消えた金野を睨むように立つ俺に誰かが話かけてくる。

声からして女性。二十歳後半から三十歳といったところか。

薔薇井のように冷静な雰囲気では無く、明るい声をしている。悪く言うなら能天気。

俺「ああ、そうだが。アンタは？」

女性の方へと振り返る。

身長は俺より少し低いぐらい、スタイリッシュなメガネをかけ臀部まである髪は腰元で結ばれていた。

女性「初めまして。私はこの学園の教頭を勤めています、風丘 緑といいます。よろしくね？」

右手の人差し指を頬に当て軽く首を傾げる風丘教頭。

妙に可愛いらしい。

俺「ん。ああ、コチラコソヨロシク風丘教頭」

少しどもり気味になってしまった。

決して見惚れていたせいでこうなつたのでは無い。……本当だ。

風丘「（緊張しているのね。金野さんからは不遜な態度をとるって聞かされていたけど、やっぱりまだ15歳ってことかしら）  
ここで立ち話するのも何だし、園長室まで案内しますね」

- - - - -

園長室に行く途中、風丘教頭についてと学園内を案内された。

門（正しくは正門）から“正面校舎”までの間が“中庭”となつており、道の脇には青々と繁つたが整然と並びその奥には綺麗に刈り揃えられた揃えられた芝生が見える。

門を南、正面校舎を北とするならば中庭には西と東にも通じる道が存在する。

西は“商店街”、東は“寮棟”となっている。

商店街には文房具に雑貨などの生活必需品から小説や漫画といった娯楽品、ファミリーレストランにファーストフード店にシヤれた喫茶店まであるというのだから恐れ入る。

正面校舎を抜ければ呆れるほど大きな“グラウンド”と体育館、いや、“多目的ホール”があった。

そしてグラウンドと多目的ホールを囲むように複数の校舎が建てられている。

- - - - -

漸く園長室についたみたいだ。

正面校舎の最上階。エレベーターもあるみたいだが、校舎内案内の為に歩いて登ってきた。

肉体的にはそれほど無いが、精神的に大分疲れたな……

## 7話 学園長

・・コンコン

風丘教頭が園長室の扉についているドアノツカーを軽く鳴らす。

風丘「学園長先生。零式君を連れて参りました」

？『ああ、入りましたまえ』

扉の脇にある機械、おそらくインターホンだろう、から返答があった。ドアノツカーに何かこだわりでもあるのだろうか。まあいいか。

妙に脂っ濃い男の声。まず間違い無く学園長のものだろう。

風丘「失礼します」

風丘教頭につき園長室に入る。

そこは、何と言えればいいのか……なんとも言えない気持ち悪さがあつた。

部屋の内部全体が紫と黒、主に紫色で塗装されていた。外側の壁のおよそ七割はある大きな窓も薄い紫色のカーテンで覆われている。

いや、それだけならば問題ない。有る意味で気品だの高貴だの一種の妖艶さなどを感じさせてくれるだろう。

では何が気持ち悪いのか、気持ち悪くさせているのか？

全てはたった1人の人物。

そう学園長のせいである。

部屋の中央よりやや窓際に置かれた大きな木製の机とその椅子にもたれていながらもなお存在感主張する脂ぎった肉体。

髪が一切ない頭と弛んだ頬、分厚い唇は口紅でも塗ったかのようにテラテラと妖しく、いや、おぞましく濡れている。

その身を包む服装は金色のスーツに赤いシャツ。ファイヤーゴールドでも表しているのだろうか。何にしる趣味の悪さ全開のお召し物だ。

更には香水だろうか？妙に甘ったるい臭いが鼻につく。

正直、吐き気と殺意が止まらない。

豚「……ふん、予定された時間よりもずいぶん遅れてのご到着だが？」

醜い豚が鳴き声を……学園長が口を開く開いた。

風丘「……申し訳ありません。予定通り学園案内をしておりましたので」

頭を下げる風丘教頭。

堅い態度と軽い皮肉から相手への嫌悪振りが伺える。

学園長「まあ……いいだろう。だが此方は貴様等と違って忙しいんでな。あまり面倒をかけるな」

マジで豚殺したい。

学園長「さて、零式 百夜君。君がアイスシルバーだということはすでに知っている」

風丘「私と学園長だけですけどね」

豚を補足する風丘教頭。

もう全部風丘教頭が喋ればいいと思う。

俺「金野から聞いたのか。……大丈夫だ、アイスシルバーに変身するつもりは無い」

学園に来る前に金野から言われていたことだ。  
アイスシルバーはすでに死亡している。と世界では認識されている。

ゆえに無用な混乱を興さないように変身はするなと。

俺としても変身する気など無い。

あの子との約束もファイヤーゴールドと共に果たしたしな。  
なにより……戦力として期待されても  
いないしな。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0167w/>

---

アフターヒーロー

2012年1月13日15時49分発行